

二通の手紙

「駄目だと言ったら駄目だ。」

「どうしてですか。かわいそうじゃないですか。僕、入れてあげますよ。」

「お前が言わないのなら俺が言う。そこどくんだ。」

立ちはだかる山田を押しつけて、佐々木は窓口に出した。

「申し訳ございません。お客様。あいにくだった今、入場券の販売を終了いたしましたので、規則上、お入れするわけにはまいりません。またの御来園をお待ちいたしております。」

高校生くらいだろうか、流行のファッションに身を包んだ二人組の若い女の子たちは、佐々木の言葉に不服な顔をしながらもきびすを返して去って行った。

この市営の動物園の入園終了時刻は午後四時、今わずかに数分を回ったところだった。

「まったく、佐々木さんは頭が固いんだから、二、三分過ぎたからってどうしたって言うんですよ。今日はまだ随分客が入っているんですよ。」

「お前がかわいそうだと思う気持ちは分かる。しかしまあ待て、俺の話聞いてくれないか。」

そう言うと佐々木は、何かを思い出すかのように、ゆっくりと話し始めた。

何年前か、今お前がやっている入園係の仕事をしていた元さんっていう人がいたんだ。

元さんは、定年までの数十年をこの動物園で働いていたんだ。その働きぶりは誰もが感心するものだった。ところが定年間際に奥さんを亡くしてしまって、子供がいなかったものだから、話し相手も身寄りもなかった。その落胆ぶりは、見えても気の毒なくらいだったよ。

「このまま職場を去ったら、何を楽しみに生きていこうかねえ。」

元さんのいつもの口癖だった。しかし、それまでの勤勉さと真面目さをかわれて、退職後も引き続き臨時で働かないかという話がもち上がったんだ。元さんの生きがいが、またできたというわけだ。

確か学校が春休みに入った頃だな、きっと。毎日終了間際に、決まって女の子が弟の手を引いてやって来たんだ。小学校三年生くらいの子なんだよ。弟の方は、三、四歳といったところかな。いつも入場門の柵の所に身を乗り出して、園内をのぞいていたんだ。時々弟を抱っこしてのぞかせてやったりしてね。そんな様子がほほ笑ましくて俺と元さんは顔を見合わせて眺めていたよ。そんなある日のこと、入園終了時間が過ぎて入り口を閉めようとしていると、いつもの姉弟が現れた。何だかいつもと様子が違う。

「おじちゃん、お願いします。」

「もう終わりだよ。それにここは、小さい子はおうちの人と一緒にじゃないと入れないんだ。」
「でもこれでやっと入れると思ったのに……。キリンさんやゾウさんに会えると思ったのに。今日は弟の誕生日だから、だから見せてやりたかったのに。」

今にも泣き出さんばかりの女の子の手には、しっかりと入園料が握り締められていた。何か事情があって、親と一緒に来られないということは察しが付いた。

「そうか、そんなにキリンやゾウに会いたかったのか。よし、じゃ、おじさんが二人を特別に中に入れてあげよう。その代わり、なるべく早く見て戻るんだよ。もし、出口が分からなくなったら係の人を探して、教えてもらいなさい。おじさんはそこで待っているからね。」



入園時間も過ぎている。しかも小学生以下の子供は、保護者同伴でなければならないという園の規則を元さんが知らないはずがない。けれども、何日も二人の様子を見ていた元さんだった。元さんのそのときの判断に俺も異存はなかった。

二人を中に入れた元さんは、雑務を済ませてすぐに出口の方に回った。

「御来園のお客さまに閉園時刻のお知らせをいたします。五時をもちまして当園出口を閉門いたします。本日は、中央動物園に御来園、誠にありがとうございました。またのお越しをお待ち申し上げます。」

閉門十五分前の園内アナウンスだった。別れの曲が流れ、園内の人々は足早に出口へと向かう。出口事務所の前で待っていた元さんは、さっきから何度も自分の腕時計と、歩いてくる人々とに交互に視線を向けていた。

閉門時刻の五時、とうとう人の流れが止まり、もう誰も出てくる気配はない。今にも門は閉鎖されようとしている。それからが大変だった。出口の担当職員に二人の姉弟を入場させたいきさつを告げ、各部署の担当係員に内線電話での連絡が行き渡った。園内職員を挙げて一斉に二人の子供の搜索が始まったのだ。

十分、二十分、刻々と時間は経過する。事務所の中、祈るような気持ちで元さんは連絡を待った。一時間もたっただろうか、うっすらと辺りが暮れかかった頃、机の上の電話の

ベルが鳴った。「見付かったか。」園内の雑木林の中の小さな池で、遊んでいた二人を発見したとの報告だった。

数日後、事務所へ元さん宛てに一通の手紙が届いた。その手紙を元さんは、何度も何度も繰り返し読んでいた。そして、俺にも読んで聞かせてくれたんだ。

前略

突然のお手紙で驚かれることと思います。お許しください。私は、先日そちらの動物園でお世話になりました二人の子供の母親でございます。その節は、皆様に大変な御迷惑をかけてしまいましたことを心よりお詫び申し上げます。ことの成り行きの一部始終を知り、私の親としての不甲斐なさを反省させられるばかりでした。

実は、主人が今年に入って病気で倒れてから、私が働きに出るようになったのです。その間、あの子たちは、いつも私の帰りを夜遅くまで待っていることが多くなりました。弟の面倒を見ながら待っている幼い娘の姿を想像すると、どんなに大変だったか、寂しかったか。今更ながらに胸が痛みます。そんな折りに、子供から聞いたのが動物園の話でした。今度連れて行ってあげると言ってはみるものの、仕事の関係上、そんなめどすら立たない日々でした。

よほど中に入りたかったのでしょう。弟の誕生日だったあの日、娘は自分で貯めたお小遣いで、どうしても中に入って見せてやりたかったのだと思います。

そんな子供の心を察して、中に入れてくださった温かいお気持ちに心から感謝いたします。自分たちの不始末は、子供ながらも分かっていたようでした。けれども、あの晩の二人のはしやぎようは、長い間この家で見ることのできなかった光景だったのです。あの子たちの夢を大切に思ってください、私たち親子にひとときの幸福を与えてくださったあなた様のごことは、一生忘れることはないでしょう。

本当にありがとうございました。

ところが、喜びもつかの間、元さんは上司から呼び出された。しばらくして、戻ってきた元さんの手には、また一通の手紙が握り締められていた。それは「懲戒処分」の通告だった。今度の事件が上の方で問題になっていたのだった。元さんは停職処分となった。それにしても俺はどうしても納得いかなかった。あんなにあの子たちも母親も喜んでくれたじゃないか。それにここの従業員だって、みんな協力的だった。それなのに何でこんなことになるんだ。

元さんは、二通の手紙を机の上に並べて置いた。そしてそれを見比べながらこう言ったんだ。

「佐々木さん、子供たちに何事もなくよかった。私の無責任な判断で、万が一事故にでもなっていたらと思うと。この年になって初めて考えさせられることばかりです。この二通の手紙のお陰ですよ。また新たな出発ができそうです。本当にお世話になりました。」

元さんの姿に失望の色はなかった。それどころか、晴れ晴れとした顔で身の回りを片付け始めたのだった。

その日をもって元さんは自ら職を辞し、この職場を去って行ったんだ。 今日のようなことがあると、元さんのあの日の言葉がよみがえってくるんだよ。佐々木は、窓越しに園内を眺めながら最後の言葉をつぶやくように言った。

「御来園のお客さまに閉園時刻のお知らせをいたします。」
ちょうどそのとき、退園を促す園内アナウンスが流れ始めた。